

大学女子サッカーのマネジメント方法の検討

ーリーダーシップ多次元モデルに着目してー

スポーツマネジメントゼミナール 1316016 金子 なな子

1. 研究動機・研究目的

女子サッカー界では、高校卒業後に競技人口が著しく低下しており、大学女子サッカーの価値を見出せていない現状がある。また、大学で競技を継続していても、卒業後に競技を続ける道が少ないため、同じ大学に所属する選手でも、部活動に対して異なる価値観を持っており、組織内の軋轢も多く生まれており、大学まで競技を続ける価値や大学部活動のあり方を考え直さなければいけない状況も存在する。また、スポーツチームは様々なパーソナリティを持つ個人で構成されており、団体競技において、所属する全選手が最大限のパフォーマンスを発揮するためには一人ひとりのメンバーの特徴に合わせたマネジメントやコミュニケーションが必要となるが、これまで大学女子サッカー選手のパーソナリティ、マネジメント方法に特化した研究はなされていない。

そこで、本研究の目的として、Chelladurai(1980)のリーダーシップ多次元モデル(Multidimensional model of leadership)に着目し、大学女子サッカー選手の身体活動に対するパーソナリティの分析、アスリート満足度の分析、理想のコーチリーダーシップの分析を行う。また、パーソナリティとアスリート満足度及びコーチリーダーシップの好みに関係性があるのかを検証し、大学女子サッカーのマネジメント方法及びリーダーシップの発揮の方法を検討する。

2. 研究方法

本研究は、関東大学女子サッカー連盟に所属する16大学(1部6大学、2部7大学、3部3大学)、計214名を対象とし、アンケート調査(Google フォーム)を実施した。

大学女子サッカー選手がスポーツに関してどのような態度で関与しているか、どのようなコーチリーダーシップを好むのか、どのようなことにアスリートとして満足を感じているかを把握するため、Sport Englandで行われた調査“Under the Skin”(2015)を参考に、矢野(2018)によって日本版に修正された修正版パーソナリティ調査項目、Chelladurai(1980)のLeadership Scale for Sports、江口(2000)のASQ日本語版を援用した。本研究では統計処理ソフトSPSS version24を使用し、記述統計、MANOVA分析、t検定を行った。

3. 主な結果と考察

研究対象者の身体活動に対するパーソナリティ分類を行ったところ、7つのクラスター全てに分布されたが、2つのクラスターに大きく偏った。日頃から部活動に取り組んでいる女子サッカー選手を対象に行ったためこのような結果になったと考えられる。

アスリート満足度の分析では学年別と競技力別で有意差がみられ、パーソナリティとア

スリート満足度の関係に有意差はみられなかった。

アスリート満足度には組織内での自身の立場が影響していることが明らかになった。学年別に見ると、「能力の活用」、「チームの社会的責任」、「個人の貢献」の3因子すべてにおいて1年生が3,4年生より高い満足度を示した。学年によって、周囲から求められること、自身の立場や役割・責任が異なるため、自分自身の役割や行動に満足を感じられなくなっていることと、長い間同じ組織に所属することでマンネリ化し競技に対する熱中度が低下していることが考えられる。また、競技力別にみると「個人パフォーマンス」、「チームのパフォーマンス」、「能力の活用」、「チームの社会的責任」、「個人の貢献」の5因子で有意差がみられた。「能力の活用」、「個人の貢献」の因子では競技力の高いレギュラーの人ほど満足度が低い結果となった。チームの中での競技力の位置付けが高く、チームを引っ張る存在でなければいけないという責任感から自身の現状に満足を感じられていないことと、チーム内での競技力の位置付けが高いことから自身に対する期待や、自身の実力を過大評価し満足を感じられていないという、2つの要因が考えられる。

理想のコーチリーダーシップでは学年別、競技力別ともに有意差はみられなかった。また、パーソナリティとの関係も有意差がみられなかった。理想のコーチリーダーシップは自身の立場やパーソナリティによって左右されるものではなく、過去の指導者のリーダーシップのスタイルの影響や、所属組織の運営体制の影響が大きいと考えられる。一方で、大学女子サッカー選手全体で理想のコーチリーダーシップを見てみると、「権威的行動」の因子では高い数値を示し、コーチが権限を持ってチームを率いるリーダーシップを好んでいることが明らかになった。しかし、指導者がすべてを決め、選手に指示を出すコーチリーダーシップを教育機関である大学の部活動で行うべきなのかは今後検討が必要である。

4. 結論

大学女子サッカー選手の身体活動に対するパーソナリティは、2つのパーソナリティに偏って分布され、身体活動に対して似たようなパーソナリティを持っていることが明らかになった。アスリート満足度及び理想のコーチリーダーシップにパーソナリティは関係しないことが示された。

アスリート満足度は、組織内の自身の立場に影響されており、学年、競技力を考えたアプローチを行う必要があるとされ、また、本研究の対象者全体の傾向として、チームや個人のパフォーマンス(結果)には満足を感じているが、その過程での仲間との関わりには満足できていないことが示されたため、過程にも目を向けたアプローチが必要である。

理想のコーチリーダーシップに、組織内の自身の立場は関係ないことが明らかになった。大学女子サッカー選手は権限を持ち、チームを率いていくリーダーシップのスタイルを好んでいることが示されたが、リーダーシップの方法は検討の余地があるとされた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた小笠原先生、親身になってアドバイスをしてくださりました大学院生の三倉さんに心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。また本研究のアンケート調査にご協力くださいました、関東大学女子サッカー連盟に所属する16大学の皆様にも感謝致します。